

【試し読み版】



八坂書房

6

【第 I 卷第 9 章】

9

ジンプリチウスは一匹のケダモノ
から一人のキリスト者になる

わたしは食べものにくらいつき、おしゃべりにしばし封印をした。ただしそれも、欲しいだけエサを与えられたあと、やがて老人から、ここを出ていくようにと命じられるまでにすぎなかったけれども。わたしは百姓生まれのガサツな頭で、思いつくかぎりのありとあらゆる丁重なことを繰り返り出し、わたしを遠ざけず、そばに置いてもらえるように隠者の気もちを動かそうとした。たしかにわたしのようなもの目の前にいると隠者のじゃまにはなるのであって、だからそれを日々この人が我慢していくのはたいへんな気苦労にちがいなかったのだが、それでも隠者は、最後には心を決めて、一緒にいることを許してくれた。それはすでに齢を重ねた隠者が、わたしを使って、まさかあれこ

れと自分の手伝いをさせようと考えたからではなく、わたしにキリストの教えを学ばせようと思ったからだった。ただし、まだごくひよわな少年にすぎないわたしが、ここでの厳しい暮らしに、これからずっと耐えていくことはできるのか、それはきつとかなりにむずかしいことなのではないか、それが隠者のいづく、目下の最大の心配であった。

およそ三週間の時が、試用期間としてわたしに与えられた。それはちょうど聖ゲルトラウトが果樹園(1)の働き手たちとともに野に出る季節だったが、わたしはその人たちのために、しっかりと役に立つことができた。見事にこの期間をもちこたえたわたしを、隠者はやがて格別に気に入ってくれたが、それはわたしの仕事ぶりのためではなく——ち

なみにこういう畑仕事は、そもそも小さい時から習い済みだった——、むしろ隠者の語る教えにたいして、とても熱心にわたしが耳を傾けることに気づいたからであつた。わたしの心という書字板は蠟のようにやわらかく、しかもすべすべとした新品であつたので、そうした教えを小気味よいほどに吸収していったのである。

そんなこんなで隠者は、あらゆる善きものへわたしを導かんとますます熱心になり、まずは墮天使ルチファアの話から講義を始め、それから樂園パラダイスのことを物語つた。この樂園の話では、わたしたち人間が、われらの両親にあたるご両人とともにそこから追放されたことを教え、そこからモ—セの戒めへと話を進めて、神の与えた十の戒律とその読

み解きをしながら——隠者はこのモーセの十戒というものについて、それをもとに神の御心を知ることができ、それに従って神に好まれる神聖な人生をおくることができる。真実の物差しだと言った——、つづいて悪事と美德を区別し、善きことを行つて悪しきことから離れるすべを教えた。最後に取りあげられたのは福音書であり、キリストの誕生と受難、そして死と復活について隠者は語った。この話の締めくくりは最後の審判のことだったが、目の前には、まさしく天国と地獄がそのままに見えるような心地がした。

隠者はこうしたすべてを適切な詳しさで、しかも決して大胆な脱線をすることなく、わたしが理解し把握する能力にちようどと思われる頃合いを守つて話してくれた。新し

い別の事がらに移る前には、眼前の一つの事がらをきちん
と習い修めるようにし、またわたしからのあれこれの質問
を最大限の忍耐をもって受けとめ、それを巧みに処理して、
こちらに合わせた説明をしてくれた。教えを注ぎこむのに、
これ以上の善き方法はなかったというほかはない。隠者の
暮らしぶりと授業は、わたしにとってまさに終わりのない
日曜説教のようなものであって、他方、まったく手の施し
ようのない愚か者、木偶の坊というわけではないわたし
の知性は、神の恵みによって、隠者の教えから確かな実りを
受けとったのであった。やがてわたしはひとりのキリスト
者が知るべきすべてのことを、予定された三週間のうちに
身につけ、またそればかりか、隠者の教えに大いなる愛着



をおぼえて、もはや夜も眠れないほどになった。

わたしは後に、この時のこと何度も思い返しては考えこんだが、その結果、アリストテレスの『靈魂論』第三巻で言われていることは、まったくもって正当なことなのだと言がて悟ることになった。すなわちアリストテレスは、人間の魂を何も書きこまれていない、空からの書字板に喩えており、その板面にはありとあらゆる事がらを記すことができず。そしてこのすべすべとした板面には、日々の弛まぬ書きこみと鍛錬によって知恵が刻みこまれ、やがていつの日か、欠けるところなき完成へと到達するのであるが、このすべての道のりを整えたのは至高の創造者なのである、というのである。またアリストテレスの註釈者であったアヴ

エロエスは、やはりかの哲人の『靈魂論』第二卷について——ちなみにアリストテレスは、認識の力はあくまでもひとつの可能態として存在するのであり、もし学問の実践がなければ、その力は現実のものとならない。すなわち人間の知性はもちろん高い能力をもつものであるとはいえ、たゆまぬ鍛錬を伴わなければ、まったく中身のないままに終わると、そう述べているので——、そこでアヴェロエスは、次のような明解なる結論を示した。つまり魂は、それ自体としては何の實質ももたないものだとしても、まさに学問ないし鍛錬によって完成へともたらされるのである。同じことを、かのキケロも『トゥスクルム莊対談集』第二卷のなかで明言している。キケロは人間の魂をひとつの畑に

諭えており、もしそれが教えと学問、鍛錬を施されない場合、たとえ本性のうえでは実りの力を有するとはいっても、それを耕し、種をまくことがなければ一切の果実をもたらすことはできないのである、と。⁽²⁾

わたしはこのすべてを、わが身を実例として証明したわけである。というのも、あの敬虔なる隠者が差し出したものをわたしは何もかも、またたく間に吸収していったのだから。とはいえそれはひとえに、わたしの魂のまっさらな書字板にまだ何も書かれておらず、何か新しいものが注ぎこまれるのを邪魔するような、前もって刻みこまれた図柄のごときものが、そこに何ひとつないことを隠者がきちんと察知していたからであった。ともあれ他の人びととの比

較で言えば、わたしには無垢なる素朴さがひとときわ保たれていたのであつて、だからこそ隠者は——そもそもこの老人もわたし自身も、わたしの真実の名前を知らなかつたせいではあるけれど——、わたしのことをただ文字どおりの単純ぼうず、つまりへジンプリチウス⁽³⁾と呼ぶことにした。

時を同じくしてわたしは、祈りを唱えるすべも隠者から習い覚えた。そしてこのままこの場所にいたいというわたしの揺るがぬ思いに、隠者もとうとう折れるしかないと観念すると、今度はわたし一人が住むための小屋を共に協力して建てることになった。それは丸太と柴と土を材料にした、⁽⁴⁾隠者の住まいとよく似たもので、例えばマスケツト銃兵が戦場で身を横たえる天幕のような、あるいはこう言

ったほうがましかもしれぬが、いくつかの地方の農民たち
ちが作る、かぶ蕪を積み上げた小山のような形をしていた。こ
の住まいの天井は低いので、とてもその中でまっすぐに立
っていることはできず、また枯れ葉と草で作られた寢床も、
そもそも小屋自体と大差ない大きさだったから、いったい
この穴倉のごとき住まいを一軒の小屋と呼ぶべきか、それ
とも天井をくつつけた寢床と呼ぶべきか、考えこんでしま
うわたしではあつた。

〔訳註〕

(1) 聖ゲルトルートとも。七世紀ベルギー、ニヴェル修道院の修道女で
あり、農作物や果物の守護聖人。六五九年没。その祝日である三月十七
日は、農事暦では冬の糸紡ぎを終え、畑や果樹園の作業を始める日にあ

たった。隠者は、ここで少年の魂という畑に種蒔きをし、実りのための作業を開始する、と読む先行研究もある。

(2) この段落におけるここまでのアリストテレス、キケロ関連の内容は、ガルゾーニ『普遍広場』（巻末の「案内」参照）からのほとんどそのままの引き写し。本作にはこうした同時代の文献を利用した箇所がいくつもある。ガルゾーニの書物は、大学や学識層と無縁なまま、自身の努力と工夫で知識を積み上げるほかなかった作者にとって、最も豊かな知の源泉であった。

(3) 原語はラテン語 *Simplicius* であり、「単純素朴・純朴・阿呆な男」というくらいの意味。最上級の意味を伴う表題の「ジンプリチシムス」と同じく、肯定的な意味での純粹さと、否定的な意味での愚昧さとの両極に大きく広がる意味を担う。

(4) 原語 *Musquetier* は、近世ヨーロッパの軍隊でマスケット銃を携えた歩兵。マスケット銃は砲身内に施条（ライフリング）のない歩兵用の旧式前装銃。十七世紀を舞台とする A・デュマ『三銃士』（一八四四年）の兵士もこの銃を用いる。

[著者紹介]

ハンス・ヤーコプ・クリストツフェル・フォン・
グリンメルスハウゼン

Hans Jacob Christoffel von Grimmelshausen (1622頃-1676)

ドイツ・バロック文学を代表する小説家・著述家・暦作者。ドイツ中西部ヘッセン地方の古都ゲルンハウゼンに生まれ、パン職人だった祖父のもとで育つ。三十年戦争に従軍して各地を転戦したあと、ドイツ南西部の上部ライン地方に居を定め、貴族の所領における執事、酒場の主人、町の代官としての職務をこなす生活のなかで、晩年の十年足らずのあいだに数多くの著作を執筆する。支配階層と民衆層の中間領域を生活圏として社会の緊張関係をつぶさに観察しながら、近世ヨーロッパに成立するピカロ（悪漢）小説と阿呆文学の傑作群を残したが、変名のもとに書かれた代表作『ジンプリチシムス』の著者であることが世に明らかとなったのは、ようやく19世紀中葉のことだった。当代の大ベストセラーはやがて「ジンプリチシムスもの」と呼ばれる類似作品のブームを没後においても発生させる。時代の硬軟さまざまな言説に取材しつつ、それと戯れるように形成された生氣あふれる言語表現は、後のグリム兄弟によるドイツ学の営みにとっても貴重な資料となった。

[訳者紹介]

吉田 孝夫 (よしだ・たかお)

1968年鳥取県生まれ。

奈良女子大学文学部教授。

京都大学大学院文学研究科博士後期課程修了（ドイツ語学ドイツ文学専修）。博士（文学）。

著書に、『山と妖怪 ドイツ山岳伝説考』（八坂書房）、『語りべのドイツ児童文学 O・プロイスラーを読む』（かもがわ出版）、訳書に、プロイスラー『わたしの山の精霊ものがたり』、『かかしのトーマス』、『ニット帽の天使』（さ・え・ら書房）、ラーニシュ『図説 北欧神話の世界』、ホイスラー『図説 ゲルマン英雄伝説』、ザルトーリ『鐘の本』、グリム兄弟『ドイツ伝説集』（八坂書房）などがある。

ジンプリチシムス——原典訳『阿呆物語』

【試し読み版】その⑥

グリーンメルスハウゼン作

吉田孝夫訳

二〇二六年三月二十五日 発行

発行所 (株) 八坂書房

千代田区神田猿樂町一—四—十一

©2026 YOSHIDA TAKAO 無断複製・転載を禁ず

本ファイルは試読用に判型を変え再編集したものです。
総目次、ならびにその他詳細はこちらをご覧ください。

<http://www.yasakashobo.co.jp/books/detail.php?recordID=787>